

富山県の高山蝶

大 野 豊

富山平野から朝夕にながめる立山など高山の峰々は高くそびえ富山県民のほこりであり、心のささえでもあります。その姿はすばらしく感動的ですが、美しいだけではなくそこをすみかとするライチョウや高山植物など、ほかでは見ることできない動植物が生息しています。

高山植物のチングルマやライチョウは広く県民に知られていますが、同じ高山帯にすむ高山チョウはあまり知られていないようです。氷河時代の生き残りの種などと言われる貴重なチョウたちを紹介しましょう。

1. 日本の高山チョウ

日本では以下の13種が高山チョウとされています。このうちベニヒカゲ、オオイチモンジ、コヒオドシは、緯度が高く寒冷な北海道では平野部でもみられるので、本州では高山チョウですが北海道では高山チョウではありません。

クモマベニヒカゲは本州・北海道ともに高山チョウとされています。

本州では次の9種が高山チョウとされています。

- ・ジャノメチョウ科 タカネヒカゲ
 ベニヒカゲ
 クモマベニヒカゲ
- ・セセリチョウ科 タカネキマダラセセリ
- ・シロチョウ科 ミヤマモンキチョウ
 クモマツマキチョウ
 ミヤマシロチョウ
- ・タテハチョウ科 オオイチモンジ
 コヒオドシ

北海道では次の5種が高山チョウとされています。

- ・アゲハチョウ科 ウスバキチョウ

- ・ジャノメチョウ科 ダイセツタカネヒカゲ
 クモマベニヒカゲ

- ・タテハチョウ科 アサヒヒョウモン

- ・シジミチョウ科 カラフトルリシジミ

2. 高山チョウの分類

高い山で見られるからすべて高山チョウと言うわけではありません。また、その生息場所や生活の仕方が種によって違います。高山で見られるチョウは生態および生息環境から次のように分類されています。

(1) 真正高山種

一生（卵、幼虫、さなぎ、成虫）を高山帯（本州では標高2,500m以上）のみを生息地とするもので、本州ではただ一つタカネヒカゲだけです。

(2) 高山分化種

高山帯と亜高山帯（本州では標高2,500m～1,500m）を生息地としています。

それぞれの地域で一生を送る種で成虫、幼虫の時代に高山帯と亜高山帯へ移動しません。

富山県ではミヤマモンキチョウだけです。

(3) 好高山種

亜高山帯にも生息地があります1,000m以下の低地にも生息する種です。

富山県ではクモマツマキチョウ、コヒオドシ、ベニヒカゲ、クモマベニヒカゲの5種がこのグループです。

(4) 疑高山種

谷間などに存在する草原など高山帯に似た環境を生息地とする種です。

本州ではオオイチモンジ、ミヤマシロチョウ、タカネキマダラセセリの3種とされています。

富山県ではいずれの種も採集記録が少なくミヤマシロチョウはいません。

以上の(1)から(4)にふくまれる種が高山チョウとされているものです。

(5) 偶産種

高山チョウではありませんが高山帯で偶然に見られる種です。

立山の頂上にいるといろいろなチョウが見られます。最も多いのはキアゲハで頂上付近をせん回しています。これはおもに低山帯を生息地としオスが頂上でテリトリーを作っているのです。

その他、ミヤマカラスアゲハ、ミドリヒョウモン、フジミドリシジミ、アサギマダラ、ヒメキマダラヒカゲなどもよくみられます。

3. 富山県の高山チョウの生息状況

富山県には本州でみられる9種の高山チョウのうちミヤマシロチョウをのぞく8種の高山チョウが見られます。

(1) タカネヒカゲ (写真：1)

高山帯（標高2,500m以上）にのみ生息している日本列島を代表する高山チョウです。

北アルプスと長野県八ヶ岳に生息していましたが八ヶ岳では絶滅したようです。

県内では薬師岳や水晶岳を中心とする南部山岳地帯と後立山の白馬岳や雪倉岳の頂上ふきに生息し、ハイマツと砂レキ地がいりまじった地形にのみで見られます。



写真1. タカネヒカゲ

同じような地形のある立山や剣岳では見ることはできません。その原因はよくわかってはいません。しかし次のようなことが考えられます。このチョウ生まれた場所から移動しません。そのため生息地の地質の成り立ちと深く関係がありそうです。立山や剣岳は薬師岳などより地質が新しく、もともと分布しなかったか、もしくは立山火山の火山活動により絶滅したのかいずれかだということです。タカネヒカゲは地史をものがたる貴重な生物なのかもしれません。

ときどき、立山や剣岳でタカネヒカゲを見たという話を聞きますが、それはたぶん、タカネヒカゲに良く似たヒメキマダラヒカゲ（写真：2）だと思います。



写真2. ヒメキマダラヒカゲ

メスは8月の初め小石の間に生えるイワスゲに一つずつ産みつけます。卵は10日間ほどでふ化し幼虫はイワスゲを食べ、晩秋になると小石の下にもぐりこみ、冬をこします。次の年の夏、雪解けとともに目覚め、再びイワスゲを食べ成長し2度目の冬をこし、3年目の初夏に幼虫はサナギになり、7月中旬に成虫になります。

このように高山帯のきびしい環境で2度も冬をこし、さらにその間、クモなど天敵におそわれてへっていきます。メスが産卵する100個ほどの卵のうち成虫になるのは1匹か2匹だと思います。

富山県の自然保護課は、この貴重な生きものを密猟から守るため、昭和53年から高山チョウ保護パトロールを毎年7月半ばから下旬にかけて実施しています。

はじめたころは採集者もいましたが、最近ほとんどいなくなり、密猟による絶滅の心配は少なくなりました。それでもタカネヒカゲの数は年々少なくなっています。

とくに標高の低い2,600mくらいの生息地ではたいへん少なくなり、絶滅が心配されています。

その原因はよくわかりませんが、最近話題になっている二酸化炭素などによる地球の温暖化と関係があるのではないかと考えています。

標高の高い薬師岳（標高2,996m）などでは生息地の面積は広いのですが、低い北の俣岳（標高2,661m）では生息場所がせまく、温暖化が進むと生息地がなくなる可能性があります。

(2) クモマベニヒカゲ（写真：3）

ベニヒカゲとよく似ていますがハネの表のだいたい色のもようがはっきりしているのと、後ろのハネの裏に銀色のもようがあるので区別できます。

また、ベニヒカゲが立山・弥陀ヶ原のような草原状の場所で見られるのに対し、このチョウは剣岳や大日岳への登山道などの斜面で見ることができます。発生時期も7月下旬から発生し、ベニヒカゲより早いようです。



写真3. クモマベニヒカゲ

ベニヒカゲは立山・弥陀ヶ原では多くいますが個体数はきわめて少なく、生息する範囲もせまく、標高1,800m以下では見ることができません。このチョウもタカネヒカゲ同様、卵から成虫になるのに2度冬を越しますが最初の年は卵で越冬し、次の年は幼虫で越冬します。メスはイネ科やカヤ

ツリグサ科の植物に産卵します。

富山県下で観察に便利な場所としては天狗平小屋の前の草つきで7月下旬から8月の初めに見ることができます。

(3) ベニヒカゲ（写真：4）

北アルプスの標高1,500m以上の草原状の地形に生息します。8月ごろ立山の弥陀ヶ原をゆくバスの車窓から各種の花に小型の黒っぽいチョウが多数、群がっているのが見られます。それがベニヒカゲでバスにひかれたハネが道路上にたくさん散らばっていることもあります。



写真4. ベニヒカゲ

県西部の人形山や白木峰は標高1,500m以上ありますがベニヒカゲは見られません。しかし、山が連なっている石川県の白山には分布していますどこまで分布し、どこでいなくなるか調べる必要があると思います。

前バネのだいたい色のもようが全国的に調べると少しずつ違っており、それをていねいに調べている人もいます。富山県下のものの少し調べましたがその変化には広い幅があるようです。

メスは、クモマベニヒカゲと同様にイネ科やカヤツリグサ科の植物に産卵しますが一年で成虫になります。

(4) クモマツマキチョウ（写真：5）

オスの前バネの半分以上があざやかなオレンジ色をした日本でもっとも美しいチョウの一つでチョウの美人コンテストをするといつも一等にな

ります。メスはモンシロチョウのようでオレンジ色はありません。

このチョウが日本で最初に発見された場所が富山県内であり、1910年北アルプス後立山の爺ヶ岳西側の棒小屋乗越（標高2,500m）において中村清太郎さんが一匹のオスを採集したのが最初であるところから1977年に富山県の天然記念物に指定されました。



写真5. クモツマキチョウ

全国的には北アルプスと南アルプスのけい谷ぞいに生息し、標高350mほどのところでは5月の初めに姿を見せはじめ、標高2,500mを越える所では7月に発生します。富山県では黒部川や片貝川、早月川、常願寺川などの上流域で見ることができます。神通川では上流の岐阜県ではいますが県内流域で見ることができません。庄川や小矢部川では岐阜県でも生息していません。

クモツマキチョウが河川流域で発生するのはメスが産みつける植物、イワハタザオやヤマガラシなどがそのような環境に生えているためです。

立山・称名滝周辺は昔からこのチョウの多産地として有名でしたが、その美しさから全国から採集者がたくさん集まり、密猟されたため最近はなかなかその姿を見るのが難しくなりました。

(5) ミヤマモンキチョウ（写真：6）

立山・弥陀ヶ原を代表する高山チョウでオスは黄色、メスは白色のハネにピンク色のふちどりをした優雅なチョウです。7月の半ばごろより姿



写真6. ミヤマモンキチョウ

を見せ8月まで姿を見ることができます。

あの雄大な弥陀ヶ原の短い夏をおしむかのように花から花へ飛びまわる姿は一枚の絵を見るようです。

世界的にはこのチョウの仲間はユーラシア大陸の草原を生息地としてますが、本州の生息地では山岳地帯のりょう線が多く見られ、弥陀ヶ原のような草原を生息地としているのは富山県だけのようです。県内でも南部山岳地帯の赤牛岳や船窪岳では2,500mを越えるりょう線に生息しています。

ミヤマモンキチョウのメスはクロマメノキの葉の表面に約1mmほどのラクビーのボールの形をした卵を一個ずつ産みつけます。卵は最初、白色ですが2～3日でピンク色に変わります。10日間経たつと今度は黒っぽくなりふ化します。幼虫はしばらくクロマメノキの葉を食べて育ち幼虫で冬を越します。

立山・弥陀ヶ原では最近、平地性のモンキチョウがまじって飛ぶのが見られます。バス道路ができる前はほとんどいなかったのですがモンキチョウの食草のマメ科の植物の種が車について登ってきたのだと思います。今後ますます増えるのではないかと心配です。

(6) オオイチモンジ（写真：7）

本州では1,500m前後の亜高山帯に見られ、長野県では上高地や新穂高温泉周辺の富山県に近い所で見られます。

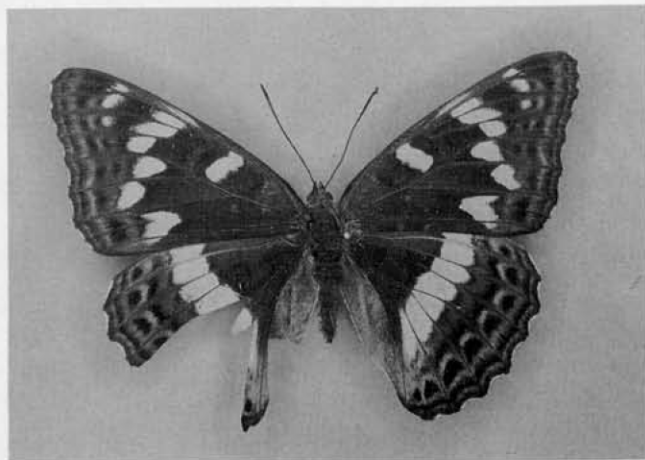


写真7. オオイチモンジ

富山県内では、1960年8月3日黒部第四ダムの建設工事現場で採集された一頭のメスがゆい一の記録です。以来35年間記録がありません。

オオイチモンジの生息環境は、開けた明るい谷間のドロノキやヤマナラシの大きな木が生えた平らな地形の場所であり、長野県の有名な上高地が代表的な地形だと思います。

県下でも立山カルデラや有峰などのよく似た地形の場所があります。富山のチョウの研究者が調べていますが、まだ見つかっていません。

(7) コヒオドシ (写真：8)

盛夏に北アルプスのりょう線を歩いているところのチョウに出会います。また、9月の遅いお花畑でたくさんのコヒオドシがミツを吸っているのが見られます。



写真8. コヒオドシ

秋に十分栄養をたくわえ山のふもとへ降りていって成虫で冬を越します。次の年の春に山のふもとでハネのこわれた個体が見られます。

コヒオドシのメスはホソバイラクサに産卵します。立山・称名滝への道路でホソバイラクサにたくさんの幼虫がむらがっているのを見ることがあります。

(8) タカネキマダラセセリ (写真：9)

北アルプスの1,500m前後の傾斜面で、イネ科のイワノガリヤスの生えている場所を生息地としています。富山県内では数回の記録しかありません。

黒部川の源流に近い薬師沢で採集記録がありますので、毎年高山チョウ保護パトロールの際、調べていますが見つかりません。多分、生息数がきわめて少ないのだらうと思います。

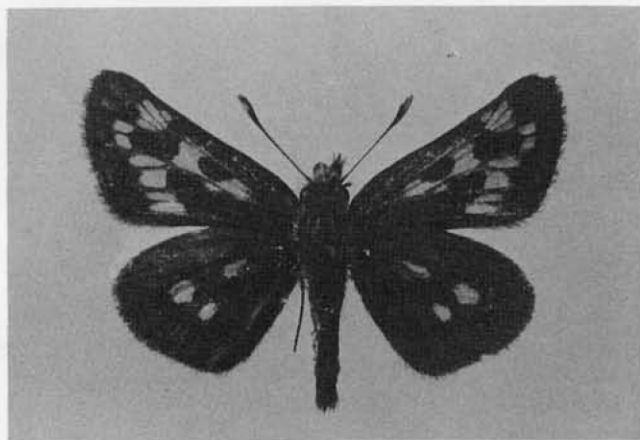


写真9. タカネキマダラセセリ

以上、富山県で見られる高山チョウを、ご紹介いたしました。紙面の関係でそれぞれの種についてくわしく紹介できなかったのが残念ですが、それは次の機会にまわしたいと思います。

立山などに登られたときには高山植物や雷鳥だけでなく、高山の生き物の重要な一員であるチョウたちにも目を向けて下さればありがたいと思います。

(科学文化センター)